



第7回 地域共生社会推進全国サミット in かが
ともに支え合う健康で心豊かなまちづくり

加賀市の事例紹介



加賀市の事例紹介

令和7年11月20日(木) 14:50▶16:30 加賀市文化会館 ホール



いきがい！やりがい！ 生きやすく、いきいきした地域づくり

司会	ながた ▶ 永田	ゆう 祐氏	同志社大学 社会学部 教授
登壇者	いいかい ▶ 飯貝	まこと 誠氏	公益財団法人あくるめ 理事兼事務局長
	よしだ 吉田	みちよ みち代氏	ゆたか助産院 院長 HappyAXIA 代表(加賀市) 公益財団法人日本助産師会 理事
	ふるい 古井	まさみ 正美氏	山代地区高齢者こころまちセンター 山代すみれの家 管理者
	いしお 石尾	だいすけ 大輔氏	ひきこもりソーシャルブリッジプロダクション



▼永田：皆さんこんにちは。ご紹介いただきました同志社大学の永田でございます。今日は司会を務めさせていただきます。

それではこれから、加賀市の事例紹介～生きがい！やりがい！生きやすく、いきいきした地域づくり～を始めたいと思います。ちょっと噛みそうなタイトルでここがちゃんといえるか心配してたんですけども、ちゃんと言えましたのでもう大丈夫かなというふうに思います。

生きやすさという言葉、生きづらさという言葉よく使われるんですけども、この生きやすさの方が、何か前向きな感じがして、このタイトル私は非常にいいなというふうに思っています。ここからはご当地加賀市の事例に学びながら、自分らしく生きることができる地域共生社会、それをどんなふうにしていけばいいのか、皆さんと一緒に考えて参りたいと思います。

それでは早速ご登壇者の皆さんをご紹介したいと思います。まず初めに公益財団法人あくるめ理事兼事務局長の飯貝誠さんです。続きましてHappyAXIA代表、ゆたか助産院院長で日本助産師会理事でもある、吉田みち代さんです。山代地区高齢者こころまちセンター山代すみれの家管理者の古井正美さんです。最後に、ひきこもりソーシャルブリッジプロダクション石尾大輔さんです。この皆様と一緒に考えて参りたいと思います。

以降の大まかな流れですけれども、それぞれの皆様から概ね15分程度ご報告をいただき、それらを踏まえたテーマに沿った意見交換をして参ります。

スライドでいただいた質問なんですけれども、時間の関係です、すべてを取り上げることは難しいかもしれませんがあらかじめご了承いただければ

と思います。

それでは早速ご報告の方に移りたいと思います。飯貝さんからご報告をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。



▼飯貝：はい。ありがとうございます。公益財団法人あくるめの飯貝と申します。本日は共生に関わる事業についてご紹介させていただけたらと思います。ちょっと時間を図らせていただきます。少々お待ちください。

皆様全国からいらしていただけたということなんですけれども、今日白山がすごく綺麗だったんですけどご覧いただけましたでしょうか。僕ら地元の心の山が白山でして、我々財団のロゴにも山があったり、あと温泉があったりするんですけども、今日の共生サミットの加賀市のロゴと似ていて、ちょっとうれしかったという話からスタートさせていきたいと思います。では、お話開始させていただきます。

私は公益財団法人あくるめの飯貝と申します。理事をしております。我々の財団は石川県加賀市を拠点に、子育て若者支援、地域支援をしている財団になります。加賀市地域の財団です。我々のビジョンは子供たちの笑顔が行き交う元気な地域をということで、まちの未来に向かってチャレンジし、応援し合う社会を目指して活動しております。2017年に設立してから公益財団となりまして、現在9期目の活動しております。

事業なんですけども大きく4つありまして、今日はこの共生とか生きやすさとかに関わる部分としまして助成事業、交流事業、社会教育普及事業のご紹介をさせていただきたいと思います。

まず、社会教育普及事業からご説明させていただきます

きたいんですけど、地域の方と子供たちが接点を持つようなイベントを学校に行き行ってやるっていうのを、加賀市内で普及するような取り組みをしております。つながりづくりとして行っております。

また次に、交流事業のご説明を差し上げます。交流事業としまして、もともと市から委託を受けた別の事業者の方がやられていた民間の図書館、おんせん図書館みかんっていうのを、我々が始めたわけではないんですけども引き継ぎまして、運営を行っております。このおんせん図書館、民間図書館は実際本も借りれるし、あとカフェとかも、セルフカフェなどできるんですけども、ちょっと変わった仕組みがあります。これは、山代地区にあります。そのおんせん図書館のちょっと変わった仕組みというのが、一箱本棚制度によってできています。現在この今見えている棚に76名の本棚オーナーさんがいらっしゃって、その方たちが自分の好きな本を置いたり、趣味の本を置いたり、お店の宣伝をしたりされてらっしゃいます。

皆さんどうですか、月額2,000円で自分の本棚を持ちたいですか？言ったらどうですかね？はい。本棚持ってくださいの方のお気持ち、例えばですけど、何かプレゼンテーションしたりとかもあるんですけど、カフェに行き行って何かお茶を飲むっていうときですと、ずっとお客さんとしての関わりになるかと思うんですけども、このおんせん図書館みかんの場合は、ちょっと自分の置いてある本のと一緒遊びに行かない？みたいな感じで、ただのお客さんとしての関わり方以外ができるっていうところが特徴になっております。

オーナーさんには特典がありましてですね、貸切イベントをする権利があります。オーナーさんたちは、このみかんという場所を使って、例えば新しく自分で水引教室を始められた方がいらっしゃったり、あとは今の9月、10月ですと、大喜利大会を開きたいと言って大喜利を開いた人ですとか、あとカフェを中心としたいろんなポップアップショップのイベントを開いた人とか、あとはファッションショーも行われたりして、オーナーの方たちが思い思いに自分でやってみたい企画をやるっていうきっかけ作りになっております。何も自分はやったことないって方も他のオーナーに誘われて、ちょっと私もマーケ

ット出してみようかしらとか、イベント出してみようかしらっていうチャレンジする場になっているのが特徴です。

また、つながりが生まれる場所かなと思ってまして、みかんにはいろんな人が来ます。放課後は小学生たちが訪れて勉強したりゲームしたりしてて、あとはオーナーさんの健康体操が週1回行われてて、その健康体操に参加しにいらっしゃる方もいます。あとは観光客の方もいらっしゃいますし、あと今は海外のお子さんが移住されてきたんでその方に勉強教えてるオーナーさんがいたりっていうようなシーンが見られます。みかんに来られる方は誰かとおしゃべりしたいなっていうふうにはいらっしゃる方も多くて、おしゃべりもOKな図書館ですので、いろんな方がいらっしゃって新しい出会いがある場所っていうので期待していらっしゃる方もいると思います。

交流事業の説明は以上としまして、我々の財団がどんな財団かってもうちょっとお話をさせてください。我々は普通の個人財団としてスタートしたんですけども、今コミュニティ財団として活動しております。コミュニティ財団とは、地域の方々や企業の方々から志あるお金を寄付としていただいて、そのお金を、加賀市内で志ある活動されているNPOや市民活動されている方に資金仲介していくという活動をしています。地域の課題は地域の手でということで、この民間の資金循環を使って自分たちで課題を解決しようという取り組みを目指しています。我々公益財団ですので寄付をしていただくと税額控除が受けられるという点も寄付者の方にメリットになっていて、現在ではその金銭的支援だけでなく非金銭的な、物品提供するよとか場所提供するよとかっていう仲介も行っております。

コミュニティ財団についてももうちょっとお話をさせてください。コミュニティ財団の特徴は2つありまして、1つがスピード感が必要な課題に対応することということで、こちらは災害支援の際とかに行政とかが小回りがききにくいところのカバーするのに活動しています。もう1つが、行政がまだ取り扱っていないような地域課題について活動していくということがあります。こういう活動のことを、困っている人は地域に確かにいるけれど、まだ社会的な認知度

が低い課題について、ここにも課題がありますよと旗を立てて社会的な認知を広めていく活動をイシューレイジングといいます。我々はこのイシューレイジングっていう活動をコミュニティ財団になって始めました。今日はその事例を、助成事業の事例として紹介したいと思います。

かがじょ基金という基金を2022年に設立しました。かがじょ基金は、加賀市の若年女性を支援する基金です。彼らが孤立せず、尊重されて過ごせる地域を目指しております。我々がコミュニティ財団として活動しようと思って地域課題を調べたときに、15歳から25歳の行政のサポートとかが薄いなということに気づき、当事者の方たちにヒアリングしてきました。そうしたところ、画面にあるように、この若年女性の人たちの生きづらさという課題がこの加賀市に実際存在する、この課題は加賀市だけではないと思うんですけど、加賀市に存在するっていうことがわかり、こちらをイシューレイジングのテーマとして2022年より活動しました。

イシューレイジングの最初は、まずこの課題に対して実際活動していく価値があるかというのを世に問うということで、共感者を募集したところ、223人の方が共感して寄付をしてくださりました。そのあと、ではこれはやはり必要な活動だということで、寄付を集めるキャンペーンを行ったんですけど、3回のキャンペーンで313万円を超える寄付をいただいております。この写真は一番最後に起こったクラウドファンディングの写真です。実際その寄付いただいたお金をもとに、地域の課題を解決する助成事業を行っていきます。今回で言うと地域に”ほけん室”を作ろうという事業で、この後発表される吉田さんが詳しくお話いただくので、ここは割愛させていただきます。

このようにして、今、我々3年間助成事業を行って、課題についていろいろな方向から事業が行われるといいなってことで行ってきました。助成事業を行うことで、地域で活動されるプレイヤー、事業者の方が生まれてきてまして、現在では、この吉田さんの事業はあくるめの助成採択事業を経て、現在では加賀市と事業を行っている状態となっていて、それがイシューレイジングの1つの例だなと感じております。

あくるめは、この女性の生きづらさだけでなくこれからもこの地域課題に関しての活動を行っていかうと思っております。いろいろ資料ありますんでまた目を通していただけたらと思います。

私たちが活動の中で大事にしているのは、先ほどの近藤先生のお話にもありましたけれども、人とのつながり、これを弱い紐帯、紐帯ってのはひもや帯のことを指してまして、人とのつながりですね、濃い居場所となるようなコミュニティも大事ですけど、緩くつながれる人と人との出会いがあって、その輪がいっぱいあると、人って生きやすいんじゃないかなと思って、その出会いやつながりが生まれるようなきっかけづくりをしております。ちょっと時間をオーバーしてしまいましたけど、以上です。

▼永田：飯貝さん、たくさん資料を作っていたいてですね、大変時間のことを気にしていただいてありがとうございます。少し私の方からも、飯貝さんの実践ですね、非常に面白いですよ。あくるめ財団さん、1つは一箱本棚制度っていうのを作られていて、みかんという居場所の中でですね、そのオーナーさん同士の、オーナーさん以外の交流ってのもいろいろあるんだらうなっていうふうに思うんですけども、交流があるよっていうようなお話もしてくださいました。多分ですね、もう少し話したいことがいろいろあったんじゃないかなと思いますので、このみかんという場の中で、緩やかなつながりが大事というふうにおっしゃってましたけれども、どんなふうな新しいつながりが生まれてどんなふうな展開が起きているのか、少しご紹介いただければと思います。



▼飯貝：はい。ありがとうございます。さっきファッションショーがありましたとだけ伝えたんですけど、オーナーさんに古着屋さんが出て、その古着屋さんがポップアップショップをするときに、一箱本

棚オーナーたちがモデルとなるファッションショーをやってみたらどうかってなって、そしたら、盛り上がり過ぎてモデルの方、高校生から60代の方までいろんな方がモデルになり、自分が好きな本をモデルにして、コーディネートしてもらった服を来てみかんの中を回るっていうイベントがありました。何か照明さん出たりとか、メイクアップも他のオーナーさんがやったりとかっていう、みんなで共同プロジェクトが行われました。

▼永田：みかんの一箱本棚のオーナーの皆さんは、月に1回とか、自分でイベントをする権利があるってことですよね。それを利用してそういうファッションショーをやられたりする方がいらっしやるっていうことで、出番があるっていうことだと思えますよね。そこから何か、新しい出会いが生まれてるという要素もあるんでしょうか。

▼飯貝：そうですね。自分でイベントができるのもありますし、他のオーナーさんからあなたも出なさいよって言って声かけられて引きずり出されるみたいなケースもありまして、今はクリスマスマーケット、今度あるんですけど、そこで私が歌いたいからウクレレを誰か引いてくださいっていう方がいて、今、他のオーナーさんたちとか来たお客さんがウクレレの練習をしているっていうような、出番に出されるみたいなこともあります。

▼永田：オーナーさんたちは地元の方が多くいますか？例えば移住者の方とかいろんな方々がオーナーになってる感じでしょうか？

▼飯貝：はい。地元の方もたくさんいらっしやいますし移住されてきた方もたくさんいらっしやいます。

▼永田：そういう方にとっては、そこが1つの新しい出会いの場みたいになっていく感じなんですか。

▼飯貝：かなりそうだと思います。

▼永田：ありがとうございます。ただ、コミュニティ財団ということなので、もう1つはやっぱりその地域の社会課題に対して、お金っていうツールを通じながらその課題解決をする皆さんを応援していくっていう役割もあると思うんですけど、先ほどかがじょ基金のお話をしてくださいましたが、何かいくつかの基金を持っていて、それでいろんな応援をしている他の例なんかもご紹介いただけますか。

▼飯貝：コミュニティ財団として初めてやったのがかがじょ基金でして、それ以外に能登の震災のときに二次避難されてる方を支える災害支援をされてる方の基金を作って、そちらでボランティアの方たちの支援活動の継続支援をしている基金がございます。

▼永田：ありがとうございます。うちの地域にはねコミュニティ財団なんかないわというふうに諦めてしまうのではなくてですね、いろんな形でこういう応援する団体っていうのが地域の中にあると思うんですけども、加賀市さんの場合はあくめさんというコミュニティ財団さんが地域の様々なチャレンジを、お金の面でもそれから場づくりとしても応援されているということでご紹介をいただきました。

飯貝さんのご報告の中に、地域の”ほけん室“を作っていく事業っていうのがこのかがじょ基金の中で生まれたというお話がありました。この活動について次にご紹介いただきたいと思うんですけども、HappyAXIAの活動を中心に、吉田みち代さんの方からご報告をいただきたいと思います。

それでは吉田さんお願いいたします。



▼吉田：皆様こんにちは。HappyAXIA 代表 ゆたか助産院助産師 吉田みち代でございます。本日は令和6年度かがじょ基金 地域に”ほけん室“をつくる事業に採択されました「加賀市に相談できる美容サロンを」事業報告より、まちの”ほけん室“をつくる～美容師とつくる居場所～ということでお話をさせていただきます。

私たち大人が、加賀市の若年女性のために何ができるのかを助産師として問い続けてきました。1年目は石川県助産師会の仲間とともに、そして2年目になる昨年は、1年目の事業でつながった市内の仲間と

ともにその活動を始めました。その足跡をご紹介したいと思います。

HappyAXIA についてご紹介いたします。HappyAXIA は、私ゆたか助産院院長の吉田みち代と思春期保健相談士で看護師の大幸有希乃さんの2人で立ち上げました。Well-being になろうをテーマに、ご機嫌で私らしく生きていくために必要な体と性の知識を様々な世代の方にお伝えするというを目的としています。それぞれの世代に合った性の知識をさらにアップデートして、多様な価値観を持った寛容な大人に安心して相談できる、そんなまちづくりのシステムを作りたいと2人で意気投合し、令和6年5月、HappyAXIA を立ち上げました。

本日の発表内容は次の通りです。まず、加賀市に相談できる美容サロンを！に至った理由。次に実際の事業の内容をご紹介します。そしてそこから考えたことをお伝えしたいと思います。

私たちはまちの”ほけん室”をこのように考えました。まず、ほけん室とは学校においては第3の居場所です。いなくてはいけない場所でもなく、もしかしただいたい場所でもないかもしれない。ただいてもいい場所ということになります。そしてその場には、偏見なく若者に寄り添い、困ったときに話を聞いて、専門職でつなげる役割を果たしてくれる大人がいる場所と考えました。また、多様な価値観を持つ一人一人が安心と感じる場所もそれぞれ多様であることから、このように、ほけん室となれる場所を1ヶ所ではなく、まちの中に所々にふやしていくイメージを作りました。そうすることで、地域のコミュニティは横につながり強化されると考えました。

今回”ほけん室”として美容室を選んだ理由は次の通りです。まず、美容室は長時間滞在するリラックスした環境であります。そして、美容師は親以外のおしゃれな大人として認識され、様々な世代から相談を受けることが多い職種でもあります。また、髪というプライベートパーツに触れながら、その人らしさを具現化するという稀有な仕事だと思いました。これらの理由により、地域のほけん室にぴったりの場になると考えました。

当初、美容室では、うちには若いもんは来んよ、とか、なんでうちらなん？というような消極的なご意見も多くいただきました。若年女性を取り巻く環

境としての大人が変われば、その大人が結果的に若年女性の支援につながると考え、今回の講座では若年女性だけが対象ではないということを強調しました。また私たちが求めている”ほけん室”としての役割は、専門職のような問題解決ではないということも強調しました。そして受講した美容師さんが得られるインセンティブは、明日から顧客とのコミュニケーションに活かせるネタとなれるそんな情報であり、そのためにもリアルな話を伝えられる講師に講座を依頼しました。3回の講座の結果と内容の詳細については資料をご参照ください。それぞれの講座の感想と講座風景は資料集に載せています。

第1回の講座は、女性の体～月経のアレコレを知ろう～でした。その中で、ついつい価値観を押し付ける言葉をかけてしまいそうで、ぱっと気づかされたという感想をいただきました。第2回の講座は、LGBTQ プラスの出張講座でした。そこではとにかく話を聞いてあげることが大切、偏見をなくすことが大事という感想がありました。第3回は、思春期を知ろう あなたの居場所という講座でした。そこでは、今回のセミナーの内容を頭に置いて接客すると、今までと違う接客ができると思うという感想がありました。

すべての講義終了後、特別にデザインされたステッカーを、14人の美容師さんの所属する13件の美容室と1件の鍼灸院に贈呈いたしました。このステッカーは、It's so you. (あなたらしいね) がデザインされています。その人のありようを尊重し、連携する気持ちを表現したとデザイナーの小塩さんのメッセージが込められていました。このおしゃれなステッカーをお店に貼って欲しいとお伝えしました。ステッカーは単なる講座終了の記念品ではなく、今後も学びを实践する象徴でもありますとお伝えしてお渡しをしました。このステッカーが地域のコミュニティで広がり、多様性を尊重する文化がさらに浸透することを期待しています。

この講座を受講してくださった石川 BA 加賀支部所属の美容室の方は全組合員の32%の方でした。少ないと思ってたんですけど、この講座を終了した美容室のすべての方が、学びの实践の象徴でもあるステッカーを受け取ってくださいました。このステッカーを受講してくれた美容室にお届けしたときには、

もっと深い話が聞きたい、もっと多くの話を聞きたい、思春期の子やLGBTQ プラスの人の対応も知れてよかった、研修資料を待合室に展示してお客様がいつでも手に取って見てもらえるようにしてあるよ、お客様が見えるところにステッカーを貼るね、など多くの声をかけていただきました。研修会後のアンケートや感想などから、美容師さん自身の変化や気づきをたくさんお聞きすることができました。

そのことから、このような講座で知識や情報を得て考える機会があったことで、これから地域の若者のためにと考えてくれる大人が増えた実感があり、地域づくりの可能性を見いだすことができました。これを機に様々な職種や地域の活動に関わる団体へと、まちの”ほけん室”を拡大していきたいと考えました。

そして今年度は、先ほど飯貝さんからもご説明いただきましたが、加賀市の男女共同参画事業かが絆・つながりサポート 2025 に提案をし、採択されました。11月8日には、かが健康フェスタにおいて、月のリズムカフェと題して女性のための相談室を併設で開設して、30人の方のご相談をお聞きしました。同時開催で月のミュージアムという生理用品グッズなどにフェムテックのお品の展示も行いまして、115人の方が来場されました。

また、そのつながりで11月15日大聖寺地区の町民学級で、来年1月に女の子たちの力になるというので、健康づくり推進員さんに向けて講座を開催する予定なのですが、その前座で命の安全教育というお話を、ちょっと年配の方向けにさせていただきました。参加人数もそれほど多くはなかったんですけど、聞いてくださった方の中には本当にいい話で、もっとたくさんの方に聞いていただきたいというような感想をたくさんいただきまして、次1月には、また健康づくり推進員さんに向けて頑張らせていただきたいなと思っています。

性と健康に関する教育は、年代に合わせて適切な時期に適切な内容を繰り返し繰り返し、らせん状に学ぶことが必要であるというふうに言われています。そのためには、学校だけではなく、家庭や地域の大人が繰り返し様々な場で伝えていくことができる地盤が必要になります。その地盤を作り、定着させるためには、地域の皆様の理解と時間が必要です。

私たち HappyAXIA は、これからもこの活動を細く長く続けていきたいと考えています。またご協力を仰ぐ事があるかもしれません。どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、石川県美容業生活衛生同業組合の皆様、個人でご参加くださった美容師の皆様、ご協力くださいましたすべての皆様に、この場をお借りして心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

▼**永田**：吉田さん、ありがとうございました。おそらく助産師として見えていた地域の課題に取り組むってなったときに、あくるめさんがそれを応援してくださって、1歩踏み出して、新しい事業を始められた。その中で、行政の方からもそういった事業が認められて、事業を助成していただきながら継続していくという、まさに地域福祉らしい展開ですが、吉田さんが、まず初めに美容室に目をつけられたってのはすごいなと思ったんですけど、その美容室の人たちが変わってくださることが重要だ、そこに働きかけていこうと最初に思われたのはどういうきっかけがあったんでしょうか。



▼**吉田**：実はあくるめ財団の理事長の山口さんという人から、どう？どう？どう？みたいな感じで、なるほどと思ってスタートした感じです。でも本当に、美容師さんって髪に触れるって結構なプライベートパーツだと思うんですね。そして長い時間いればいろんな話もします。特にやっぱり若い方だとこだわりもとてもあるから、そんなに浮気しないというか、いろんなところに転々とすることもないし、固定の指名した美容師さんに、長い時間私の話を聞いてもらう、どう見られたいとか、どんなふうに自分のアイデンティティを発揮していくかって、結構密なコミュニケーションだなと思って、なるほどと思って今回取り組ませていただきました。

▼永田：ありがとうございます。地域共生のね今日サミットなんですけど、自治体の職員さんとかでも、美容室っていうのは別な意味で注目してる自治体さんなんかもあって、いろんな情報が集まってくる場であったりとか、若い女性に限らず、地域のこと、いろんな情報が集まってきたり、あと自分のことをやはり相談されたりとか、地域の悩みをよく知っていらっしやったりとか、そういう情報の集まる場なので、あまり福祉とは直接関係ないような感じがするんですけど、やっぱり人の動線上の中にあるそういう大事な場所っていうのが、何かこう居場所とか相談とかつづやきを拾っていくようなところになるんじゃないかなっていうヒントをいただいたかと思えます。

だからといって皆さんが明日から美容室を回る必要はないと思うんですけども、地域の中におそらくそういう場っていうのは他にもあると思うんですよ。人が安心する居場所になっていたりとか、集まる場所になっていたりとか、そういう情報が集まってくる場所になっていたりとか、そういったところが皆さんの地域にないかなっていうことも、ぜひこの機会に考えていただければというふうに思います。

もう1つぜひお聞きしたいんですけども、美容室から始まったこの取り組み、今ちょっと今後の展開を出していただいたと思うんですけども、地域の皆さんとか、それ以外のいろんな皆さんにもこの取り組みを広げていきたい、その何かビジョンみたいなものがあれば教えてください。

▼吉田：1つは、そういう健康っていうところに取り組んでいっしやる市内の健康づくり推進員さんに今年はオファーをしまして、1月あたりに地区ごとでお話をさせていただく予定をしています。今後はそういう団体に向けて、少しずつ広げていきたいというふうに考えています。

▼永田：このステッカーがいろんなところに広がっていったって、若い女性の方とか、そのステッカーがあることで何か安心して相談ができたりとか、この人理解してくれる人なんだなっていうのがわかっていくとすごく行きやすくなるような気がしますね。ステッカーも広げていきたいっていう感じですか？

▼吉田：せっかくいいステッカーデザインしていただいたので、いろんなところで目にして、ああなる

ほどと思ってもらえるところまで普及していきたいなというふうに考えています。

▼永田：ありがとうございました。ちょっと私の画面が悪いのかもしれないんですけど、スライドウであんまり質問をいただいてないんですけども、皆さん何か聞いてますか。大丈夫ですか。もし、こんなこと言って結局取り上げられなかったら後で怒られるんですけども、もしよろしければぜひこちらの方でもご質問をお寄せいただければと思います。

続きまして山代地区高齢者こころまちセンターの山代すみれの家管理者の古井さんの方からご報告をいただくとすけれども、皆さんせっかく加賀に来ていただきましたので、加賀市の地域包括ケアの仕組みっていうのをですね、ぜひこの機会に知っていただきたいと思うんですけど、地域包括支援センターの相談窓口、ランチっていう形で地域密着型サービスの、皆さん各地域にですね、拠点を置いて、そこに地域福祉コーディネーターも配置するとそういう形でですね、地域包括ケアの取り組みを先進的に進めてきた自治体の1つです。今回ですね、ぜひその辺も含めて、古井さんの方から取り組みをご紹介いただきたいと思えます。

それでは古井さんよろしく願いいたします。



▼古井：こんにちは。山代地区高齢者こころまちセンター、山代すみれの家古井です。山代地区とともに取り組んだことということで発表させていただきます。

加賀市は高齢者やその家族からの介護や福祉などに関する相談に応じるため、直営型地域包括支援センターと連携した相談窓口として市内16ヶ所の地域密着サービス事業所に地区こころまちセンターを委託しています。私の勤務する小規模多機能型居宅介護事業所山代すみれの家は、平成27年から山代地区

高齢者こころまちセンターを委託されています。

地域密着サービスとは、要介護者などが住み慣れた地域での生活ができるようにするため、身近な市町村で提供される介護保険サービスです。

では、なぜ市は地域密着サービスに委託されたのか、それは地域の特性を把握し、どのようなお店があるのか、住民はどのような考え方なのか、価値観などよく知っており、身近な生活圏の事業所だからこそできる強みを最大限発揮できるからです。この身近な場所でじかに住民の声を聞き、様々な関係機関と連携し、要介護者のみならずなじみの人や場所、ものや家族との関係が途切れず暮らしていける要の場所となっています。

そこで、行政とともに地域づくりを進めるパートナーとして取り組むことになりました。今回は地域住民や地区こころまちセンターが融合し、住民主体の地域づくりをしていった山代地区の取り組みをお伝えしたいと思います。

山代地区には開湯1,300年という古く伝統のある山代温泉があります。しょうぶ湯祭りとか大田楽などあり、今年はいいうえおの発祥の地として萬松園あいうえおの杜という山代を見渡せる公園もできました。

この山代地区で相談支援する中で気になっていることは、1,980年から90年頃は特に温泉地として非常に賑わっていたため、他県から働きに来た人が多く、山代で生まれ育った地の人と他の土地から働きに来た、ここでは旅の人と言いますが、その方々が入りまじっている状況であること。旅の人、主に旅館関係の仕事をしていた人は、元気なときは仕事仲間の知人とのつながりが深かった人も、両者とも高齢になり関係が途絶え、身寄りが遠いということで、いざというときに助けてくれる人も少なくなっているということ。そして、総湯を中心にコミュニティを持っていた人も、足腰が悪くなると総湯に行けなくなり孤立化しているということ。これらのことから地域住民同士の結びつきの希薄化が目立っていると思われまます。しかしその反面、自分たちの地域であり、地域を良くしたいという山代愛の強い方が多くいらっしゃることも分かってきました。

山代地区において、地域包括ケアシステム構築のモデル事業が平成27年から始まり、平成29年3月

その報告会が行われました。支え合える地域を目指すために、健康づくりのための活動にはどういったものがあるのか、さらなる活動につながるアイデアはないのかなど話し合いました。地域住民からは、世話やきの人が少ないようになってきたとか、隣に誰が住んでいるのかもわからないとか、感じていることを率直に出し合ってもらい、改めて山代地区について考え、それでもどうにかしていこうという積極的な意見も多く聞かれました。

そんな中、ある方の「まあ、できることからやってみようよ」という声が地区全体を1歩前進させました。大きな目標を立て過ぎず、できることから実現していくということで、私たちも一緒についていける気がしました。このモデル事業の中で、地の人、旅の人とが入りまじっている異様な関係であっても、この町は自分たちの町であり、最後までこの町で、その人らしく住みきりたいという声が多く聞かれました。住民の、地域の人や地域の人で支えていくという思いを生で聞いたことが衝撃的で、私たちはこの方々と一緒にやっていきたいと心が動きました。

そのためには、私たちは何からすればよいのか考えました。その結果、1. 継続的に山代地区のことをどうすればよいか話し合う場を設置し、みんなで知恵を出し合うことが大切なのではないか。2. 山代住民からの地区に貢献したいという住民みんなの思いを大切に、小さなことからやってみてもよいのではないかと、このようなことが「山代地区を良くする会」発足のきっかけとなりました。

すぐにできることとして、みんなの知っているラジオ体操はどうかという案が出ました。場所を考える上で候補に挙がったのは山代東口です。山代地区の方々にとっては、昔電車の駅だったというなじみのある場所です。現在はコンビニと広場になっています。大勢が体操するにはもってこいの場所だということで、このラジオ体操の話がとんとん拍子で決まり、毎週火曜日の週1回ですが、ラジオ体操とタオル体操、太極拳を行っています。保健推進員の協力もあり、コロナ禍も続けられました。

また、男性を社会参加に導くために立ち上げた、健康マージャン教室があります。どの地区も男性が集まる場所がない、男性が出たがらないなど課題に挙がっています。そこで、介護予防教室の卒業生の

方々が段取りをしてくれ、健康マージャン教室が立ち上がりました。道具をどうするか検討していたとき、その話を聞いていた女性が「うちのお父さん、大工だったし、麻雀台つくれないかな。もう仕事もしてないし」とつぶやいてくださいました。認知症を患って、家ではもう何もしていないお父さんでしたが、「麻雀台ならつくれるよ」と言って、とても嬉しそうに作ってくださいました。一人一人のできることを、特技がマッチングした瞬間でした。今では月2回から4回になりました。朝早くから競って順番をとる姿も見られます。

平成30年より月1回のペースで山代地区を良くする会が進められてきました。副題は、景観の保持・地域でのつながり、支え合いの中でとつけられ、1つ1つ解決できるものから取り組んでいます。高齢者のことや困っていることだけではなく、山代の良いところをもっと知らせたいという意見や、町の中で不便なところはないか、子供たちが危険な場所はないか、また中学生は山代のことをどう思っているのかなど、意見交換会も行いました。住民や民生委員だけでなく、小中学校の校長先生にも参加してもらい、今ではまちづくり推進協議会の組織の一員となっており、地域づくりの中核となっています。

私たちは、高齢者こころまちセンターとして地域づくりに参加し、子供たちとのつながりを見いだしたり、人が交わるきっかけづくりをしています。みんな自分たちの大事な地区で安心して暮らせるよう、助け合う姿が見られます。私たちが相談を受けて聞かれる声として、認知症になってしまい迷子になってしまう人とか、夫に先立たれ寂しさを感じている人、足腰が悪くなってごみを捨てられなくなった人、収入がなくなり貧困で食事もしっかりとれない人など出てきています。でも、この山代にはそんな人たちに声をかけ、誘い合える場所、誘ってくれる人がいることがわかりました。私たちはそのような人たちが安心できる場所に困っている人の声を伝え、つなげていっています。

地域拠点として2ヶ所ご紹介します。山代温泉は伝統あるきらびやかでにぎやかな温泉です。でも、その裏には寂しい子供たちや悩める青少年、また高齢になって寂しさや不安になっている人々もいます。子供から大人へと分け隔てない人とのつながりを仕

掛けているNPO阿羅漢さんがあります。10年以上支え合いのコミュニティーを作り続けています。温泉通りには、おんせん図書館みかんさんがあり、山代にも本を借りれる図書館ができました。小学生から大学生、若者も出入りし、高齢者もここでは若者からパワーをもらっていると喜んでいきます。誰でも入っていける居心地のよい場所になっています。

まとめです。町へ恩返ししたい、できることをもっと挑戦していきたい、もっとつながりたいという人たちの、そんな目の前の人からもらったネットワークが、個々の生きやすさを生み出しているのだと感じました。そして、助けた人が実は一番幸せなんだと思う気持ち、人よし、自分よし、そして地域よしという精神につながり、温かいまちになっています。

以上で山代地区高齢者こころまちセンターの取り組みの発表を終わります。ありがとうございました。



▼永田：古井さんありがとうございました。

私もちょっとだけ、古井さんもちょっとだけ触りだけ、加賀市のね、包括ケアの仕組みについてお話をされたので、ちょっと質問もいただいでいてですね、こころまちセンターっていうものはいわゆる地域包括支援センターの機能を持つ地区社協みたいな場っていうことでしょうかっていうふうにいただいでるんですけど、多分そうではないんですよね？

▼古井：地区社協というわけではなくて、加賀市の場合は、大聖寺に、市役所の中に直営型の地域包括支援センターがあって、そこと連携した相談窓口として、中学校区だと思いますが、市内に16ヶ所相談窓口を設けていて、身近な相談窓口というふうな感じになっています。

▼永田：包括のランチという位置付けなんですね。

▼古井：そうですね。

▼永田：古井さんたちの法人は、他のいろんな事業もやりながら、このこころまちセンターについては

小規模多機能型居宅介護の中に、そういう場所を設けて看板を立ててることですかね。

▼古井：はい。小規模多機能の介護サービスを行いながら、その中の職員でそのランチ事業、市役所の相談窓口事業と、福祉コーディネータ事業を兼ね備えてやっております。

▼永田：おそらくですね、自治体の皆さんとか、実際に委託費とかどれぐらいでやってんのかとかですね、財源は何なのかとか聞きたくなるかもしれないんですけど、それはちょっと終わった後にぜひつかまえてお聞きしていただければというふうに思います。なので、加賀市さん独自の地域包括ケアの仕組みなんですよ。その中で、地域包括支援センターのランチっていうと、やっぱり高齢者の相談窓口とか場所っていうイメージが強くなるんじゃないかなと思うんですけども、何かそこについては全世代型にしていくために苦労されたこととか、努力されてることとかってありますか。

▼古井：そうですね、やっぱり高齢者ということばっかりにどうしても目が行きがちなんですけれども、今回本当にこの包括ケアシステムのモデル事業になってこの山代地区を良くする会を立ち上げたところ、私たちの中では高齢者が困ってくるから何か知恵をくださいというふうな感じで、何となく立ち上げたような立ち上がったような気がしたんですが、違うなっていうのが、その中で、まちづくりの会長さんとか顧問の方々の話を聞くと、やはりその地域の中のいろいろなご意見を聞きながら、高齢者の方のことも考えていくというふうな感じになったかなと思うので、苦労したというよりも、私たちは、本当にそこに乗ったっていうふうな感じなので、やはり地区の方々の先進的なご意見っていうのがものすごくそういう共生の方に向けていったんじゃないかなというふうな気がします。

▼永田：はい。ありがとうございます。いろいろ聞きたいことあるんですけども、私がちょっと油断してる間にすごい量のスライドになっていまして、全部のご質問にお答えできるかどうかわからないんですけども、一旦ですね、古井さんの方のご報告はここまでとさせていただきます、最後のご報告に移りたいと思います。

最後は、ひきこもりソーシャルブリッジプロダクションのファウンダー、石尾大輔さんの方からご報告をいただきます。お願いいたします。



▼石尾：皆さんこんにちは。ひきこもりソーシャルブリッジプロダクションの石尾大輔です。ファウンダーとは、活動の象徴となる人、ひきこもりを脱出して支援の活動を起こしているということで、私はファウンダーという活動を行っています。

私は今45歳です。中学のときに陰湿ないじめを受け不登校になりました。それから病気が出て眠れず、家からも出られない状態になりました。社会に出る自信がなく、大学にも進学しましたが、大学では遊びほうけてしまい、卒業まで5年半かかりました。卒業後は実家に帰ってひきこもり、誰も信じられないままずっと1人部屋にこもって本を読んでいました。人が怖く外に出られず、家族からは腫れ物にさわらないような扱いで地獄のような日々を送ってました。

昨年の正月に能登半島地震がありました。私はけがをしましたが、家族はみんな無事、ひきこもり家がなくなったので、避難所は自分がいじめられていた学校で、とても入ることができませんでした。

そんなとき加賀市でひきこもり支援をしている林さんから、加賀のシェアハウスで住まないかという打診がありました。知らない土地で知らない人と生活する不安はすごくありました。行かざるをえない状況だったので、行くことにしました。不安の中、シェアハウスにきて生活してみると、ひきこもりを理解してくれる支援者がいて、気の合う仲間がいることがとても楽しく生活することができました。あれだけ人に会うこと外に出ることが怖かった自分が劇的に変わった。自分自身が驚いています。

今まで仕事もしたことがなかったのですが、やってみると、何もできないと思ってた自分でも仕事が

できると気づかされました。そして社会の仲間入りで、自分で働いたお金で生活することができて、幸せを感じることができています。

今は自分のひきこもり体験を生かし、在宅士、在宅士というのは、ひきこもり歴10年以上、ひきこもりと堂々といえる、ひきこもりの活動をする現役のひきこもりのことです。在宅士として相談を受け、人の前で話せるようになったりする活動をして、自分のつらかったひきこもった経験が、今まではひきこもってよかったと思うようになっていきます。

今、30年前のひきこもってた自分に言いたいことは、ずっと悪いことは続かない、いい人との出会いがある、諦めるな、すばらしい人生がこれからある、自分を信じてと言いたいです。そして今、ひきこもってる人には、私も人が怖かったけど世の中そんな悪い人ばかりではないよ、いい人もたくさんいる、だからちょっと勇気を持って人とつながってください。

私たちひきこもりは家から出たくなくて出ないのではありません。出たくても出れないのです。怖いのです。こんな自分を変えたいのですが、どうしたらいいかわからないのです。そんな私たちひきこもりを、どうか理解してください。

私はこれからそんな活動をしていきます。どうか理解をお願いします。よろしくお願いします。

▼永田：はい、石尾さんありがとうございました。在宅士という言葉がなんかすごくセンスがあっていいですね。つまり何か課題っていうよりはそこを反転して、在宅士っていう自分たちのね、強みみたいなふう置き換えて呼ばれる読み方がすごいなと思って聞かせていただきました。ありがとうございます。もしよろしければ石尾さん、加賀にこられて出会った素敵なお方とか、いい一つの出会いのエピソードとかあったらご紹介いただけますか。

▼石尾：いや、本当にもうすばらしい人らに会えてすごく幸せです。何が幸せかって言ったら、やっぱりスーパーとか買い物に行ったら声をかけてくれる人がいるんですよね。そういう人は本当ありがたいです。

▼永田：応援に来てくださってる人は、先ほど声をかけていらっしゃいましたけれども、そうやって人とのつながりみたいなものができてきたってことですかね、この加賀の中で。

▼石尾：そうですね、それが一番の財産だと思います。もう人とのつながりなかったら、僕の今はないと思います。

▼永田：ありがとうございます。今日はですね、いろんな皆さんからまずご報告いただいたんですけども、石尾さんはやっぱり当事者としてご発言をいただく機会っていうことで、在宅士ですね、在宅士としてのご発言を今日はいただきました。

いろいろスライドでもいただけてるんですけども、支援者に対して、いわゆる支援をするっていう人に対して、石尾さんから見て支援者ってのはどうあるべきかっていう何か思いみたいなものはありますか。

▼石尾：僕らみたいな人間は特に何か障害とかっていうよりも、やっぱり普通に接してくれたらすごくありがたいです。

▼永田：何か特別とか、支援者っていう感じではなくて、もっと普通に接してもらってということが大事なことですかね。

▼石尾：少なくとも僕はそんな感じですね。



▼永田：ありがとうございます。もちろんみんなと一緒にっていうわけじゃないですからね、なんか少なくとも僕はっていう言い方も石尾さんらしくて素敵だなと思いました。

そうしましたら、今、一応皆さんからご報告をいただきましたので、残りの時間で皆さんからのスライドのご質問とか、それから少し全体でぜひお伝えしたいと思ってることもございますので、ディスカッションの方進めていきたいと思います。

実はですね、私プレサミットのときに、あ、プレサミットというのがあってこちらの方に伺ったときにですね、飯貝さんと古井さんにはお会いしてですね、そのときたまたま、同じ地域にあるのになんかあんまり初めてお会いするかなのような感じだっ

たので、せっかく共にいい活動なので何かもうちょっと連携できたらいいですね、なんて話を3人でしてた記憶があるんですけど、飯貝さん何かその後サミットのときに進捗を報告してくださいっていうことでしたので、どんなふうな連携が進んだか教えていただいてもよろしいですか。

▼飯貝：ありがとうございます。今、先生が振っていただいたので、市民会館のときの状況を思い出しました。同じ山代地区で近くなのにお互いのことを全然知らなかったよね、みたいな感じでお話して、そのあと古井さんと連絡先を交換させていただいて、古井さんみかんに来てくださいます、最初まずみかんで困りごとがありまして、小学生の子が夏休み結構来てくれるようになったんですけど、多すぎるというか、みんな自転車で来るんで自転車問題が起きていたところ、古井さんにちょっとご相談したところ、古井さんの系列の施設のところの駐輪場をお借りできて、駐車場の一角を駐輪場としてお貸しいただいて、その問題を解決できたっていうのと、あともう1つが、古井さんにお声をかけていただいて、山代地区を良くする会の方に参加させていただきました。私達山代地区の方とのつながりがちょっと薄い、何か遠方から本が好きの方がいらっしゃったり、移住者の方は結構いらっしゃるんですけども、山代地区の方への認知が低いっていう問題があったんですけど、まちづくりとか学校の方とかと関わることができて、そのあと本棚オーナーにまちづくりの方がなっただけだったりとかっていうきっかけにもなっております。どうぞ、古井さんもぜひ。

▼古井：ありがとうございます。本当に私、山代地区高齢者こころまちセンターとして相談の圏域がありまして、ちょうどみかさんの前のあたりも全部私たちが相談に行くところになってます。山代温泉の温泉通りという大きな通りのところにあるんですが、本当にあることは知っていたのですが全然知らなかったんで、去年のこのイベントのときにお聞きして、みかさんってあるんだ、1回行ってみたいと、でも入りにくいと思ったんですが、この会を通して行かせていただきました。

そうしましたら、本当に移住者の方とか被災者の方とか、それから図書館っていうことで、私もいいなと思って、この施設の、いろんな施設があるので、

そこに移動図書館とかできないかなあとか、それから本当に今、自転車の件言ってらっしゃったと思うんですが、みかさんの前がうちの法人の特別養護老人ホームなんですね、そこに駐車場があるし、そこで止めたらいいのになっていうことで、上の方に声をかけてお願いしました。

そういったことで高齢者の方との関わりもできたらいいなって思うことと、もう1つあったのが、私のスライドの中にもあったんですが、本当に迷子になる方が多いんですね。そうすると、地域の人いろんなことを知ってもらいたい、認知症のことを知ってもらいたい、認知症の方がもし困っていたら助けてもらいたい、そういった人が1人でも多くいたらいいなっていうことで、実はそのみかさんのところで、地域密着サービスの中では運営推進会議というものがあるんですが、そこを利用させていただいて、いろんな方に参加していただいて、認知症の方を救える、1人でも多くの方がそういったところをわかってくださる人を見つけないっていうことで、会議をさせていただきました。そこに、実際に認知症の人が立ち寄るといことはなくとも、そこを拠点にして、少しでも、1人でも2人でも、そういった方のことをわかっていただければいいなという話をさせてもらったんですね。

そしたらそのあと、認知症キャラバン、2階にもキャラバンメイト活動の展示をさせていただいたんですが、認知症を周知していく認知症サポーター養成講座というものがありまして、そういったものを地域住民の皆さんにして、それで、子供たちなりお母さんたちなり、それと地域の方誰でもが認知症の人を理解していただくっていうことも、今度講座もそこでしていただけるということも聞いています。

なので、本当にちっちゃな高齢者のことだけだなと思ったんですが、みかさんがあったことで、どんどんどんどん広がって行って、いろんな方に声をかけられたなっていうのが本当に前回のイベント、そして今日につながっているなと感じています。

▼永田：はい。ありがとうございます。なんかあれですね、この連携みたいなことが、何かちょっとしたきっかけで、2人がこう出会ったことで、一般的に言うと、あくるめさんの活動っていうのはテーマ型って言われてるような活動で、古井さんの活動

はどっちかっていうと地縁型みたいな活動だと思うんですけど、そのブリッジがなかなかいつも難しいなっていうところと言われてるんですけど、実際こうやって会ってみると、いろいろ一緒にできることがあって、どんどん展開していったっていうお話だったんですけど、もしかしたらそのヒントになるかなと思うんですけど、ご質問で、古井さんは、最初どうしてみかんに入りにくいと思ってたのか、ちょっとヒントになるかもしれないので。

▼古井：率直な意見言っていていいですか。実はみかんのところに暖簾があります。暖簾はオレンジ色のミカン。私は、ミカン、果物のミカンですね、ミカンの何かかなあとかって初め思っていました。その暖簾があることで入りづらいと私は思ったんですね。初めて入るときも実は、あの引き戸ですね、押すかな引くかなってそこで間違えて、それこそ入れなかったと。でも、中にいてくださったオーナーさんがとても優しく導いてくださいます、本当、なぜ入りにくかったのかなと思うぐらい、今では。やっぱり知らないっていうか、そういったものは怖いものですね。知ってしまうと中に入りやすい。なんかそんなものなのかなっていうふうな気がします。

▼永田：今のことをちょっとヒントに考えてみると、逆にこれご質問でもいただいているんですけど、みかんさんみたいな居場所って、何かそのオープンな面が大事なときもあるじゃないですか。いろんな人が自由に来れるように。一方で、やっぱり知ってる人がいるからいけるっていう、ちょっとクローズの側面も必要になってくると思うんですけど、そのオープンな面とクローズな面みたいなことをどういうふうにバランスとって、いろいろな人が足を運んでもらう雰囲気を作ってるのか、何かその辺の工夫してることがあれば教えていただければと思います。

▼飯貝：なるほど、バランス、確かに。まず大前提として私は実はみかんのマネージメントはしてないんです。担当者ではなくて、別にマネージャーの子がいて、マネージャーの担当者の子と本棚オーナーさんたちがいろんなイベントとかを仕掛けて、自分たちでボンボンいろんな楽しいことやってんですけど、オープンさの点で言うと、暖簾はちょっとハードルがあるが多分バランスを取ってるっていうのがオーナーさんの一部の方の意見です。観光客さ

んがいっぱい通るところでオープンすぎると観光客さんの休憩スポットになるけど、観光客さんがメインターゲットではなく、ちらっと本が好きで入ってくださる方がいるぐらいがちょうどよくて、オーナーさんとかみかんのこと知ってる方とか本が好きの方がメインターゲットなので、少し目隠しをした暖簾みたいなのが、実際すごい大きな窓があるので中見えるんですけど、暖簾によってちょっとハードルみたいな、何かこうオーナーさんの何人かにはそういうことをおっしゃられてる方がいらっしゃいます。

でもいっぱいいろんなオーナーさんがいるんで、もっと入りやすくしようって言うてる人とか、外に旗立てようとか言うてる方とかいて、今は、暖簾のリニューアル、ちょっと汚れてきたのでリニューアルを検討中で、そこでもうちょっとみんなで話し合っていけたらなという状況です。



▼永田：なんかみんなの居場所っていうのはある意味ね、皆さんにとって居心地がいいってのはなかなか難しい問題でもあるので、でもそれがゆえに、みかんとしてはどういう居場所を目指すのかとかっていうのを皆さんと多分話し合ってくっていうことなんでしょうね。はい。ありがとうございます。

先ほど吉田さんも活動の中でこれから地域の皆さんにも広げていきたいということをおっしゃってましたけれども、古井さんせっかくですので、飯貝さんだけでなく、この機会に吉田さんの活動ともなんか今後コラボが広がっていくといいなと思うんですけど、何か期待されてることとかがございますか。

▼古井：ありがとうございます。本当に高齢者こころまちセンターでやっぱり相談っていうものは、言われてきたからお答えさせていただいて相談に乗らせていただいてサービスとかがあっていうふうな感じな

んですが、実はやはりこのつなげる、先ほどの福祉コーディネーターという係があるという話があったと思うんですが、何か、全然知らないところ、知っている人もいっぱいいても、なかなかつながらないということになったりするので、今この美容室の話、保健師の話を聞いたときに、高齢者っていても高齢者の方々は特になじみの美容室があると、そこに美容室行くとおしゃれにもなるし、いろんな話を聞いてくれる、介護のことであったり、自分の子供のことであったり、自分が年をとってきたなあっていうようなこととか、いろんなことがあるので、もしその”ほけん室”というかその若年の女性だけじゃなくって、高齢者の方にもなにかそういう拠点になるような、そこで話を聞いたらランチに相談してみたらどう？ここにこういうふうな相談してみたら教えてくれるよって言うような拠点になっていただけるといいかなっていうふうな感じがしました。

▼永田：吉田さんどうでしょうか。

▼吉田：本当ですね。もう1回美容師さんに頑張っていたらなと思ったりして。実はその町民学級さんで、大人の性教育をさせていただいたときに、大体60代とか70代の方が多くて、そこで大人の性教育っていうのすっごいハードル高いかなあと勝手に思ってたんです。自分も60代になってからなんですけど。思ってたんですけど、意外とやっぱりその同意不同意っていう概念、自分の体に触れるときには私の許可を取ってっていう概念って、介護の場にも使えるんじゃないかなというふうな考えていて、私のおおむつ交換するとき私に一声ちゃんとかけてねとかいう概念って、そのままずっと人の一生、人の尊厳を守るために使える概念になるなあと思って、ちょっと老年期の方向けにも使えるぞと勝手に思ってたことなので、もう1回美容師さんにまた頑張っていたきたいという活動も広げていきたいなというふうには、今古井さんの声を聞いて思いました。

▼永田：ぜひこれをきっかけに多分地域の中につくるプラットフォームってこういうものなんじゃないかと思うんですよね。出会ったらきつこういう活動が生まれてくるよっていう人達が出会える機会をどうやって作るか、何かそういう意味では古井さんが今されてるコーディネーターっていう、地域

コーディネーターでしたっけ？っていうような役割っていうのが多分大事だなと思うんですけど、何かそういうコーディネーターの役割っていうのはちょっと意識されていますか。

▼古井：はい。コーディネーターという見方から、本当に先ほども言った高齢者だからとか、高齢者の行くところとか、高齢者が知るところとかってそんなところではなくって、地域全体を見て、そういった拠点って本当に今美容室って私はハードルが低いところだと思って、そういったところ、今食品屋さんとか、喫茶店とかっていうところにはちょっと声をかけたりしてるんだけど、そういったところってすごくコーディネートをするのにはとっても利点があるところだなって感じてます。

▼永田：今日やっぱり行政の方とかが多いと思うので、少し制度的な質問になっちゃうんですけど、生活支援コーディネーターみたいなものと近いんじゃないですかっていうご質問もいただいているんですけど、そこは違う形になるんですか？

▼古井：生活支援コーディネーター・・・

▼永田：それは加賀市の仕組みの話なのでちょっとまた・・・

▼古井：すみません。私はわからないところです。

▼永田：大丈夫です、はい。また行政の方へぜひ聞いていただければと思います。

ちょっといろんな質問いただいて、皆さんわかりますかね、これ結構大変なんですよ、シンポジストの方々全然予定してない質問をバンバンバンバンされてるので、皆さん結構混乱されてるんじゃないかと思うんですけど、結構質問が多かったのでちょっと吉田さんにもぜひ伺いたいんですけど、1つは男性の関わり方みたいなのも大事なんじゃないかっていうご質問がいくつか来てるんですけど、何かそこについてはどう考えられていますか。

▼吉田：今回一番最初のスタートがあくるめさんと組んだっていうところがあって、あくるめさんの大きなテーマが若年女性ということだったのでそこからスタートはしてるんですけど、その中でもやっぱり男性に向けてのっていうことは、いろんな場所で言われました。ここ最近の健康づくり推進さん系とか、あと町民学級とかでは男性の方向けにとか、あと、もう1つプレコンセプションケアについての事

業も別件で受けてるんですけど、そこに関しても男性向けの視点に立ったケアの話をしています。

本当に同じように、みんな生きづらさというか、どうしたら生きやすくなるだろうみたいなことが基本的なところは一緒かなあと思っていて、そういう知識があれば、もっと遠回りせずにいけるのについてというようなことに関しては、今後お伝えしていきたいなというふうに思っています。

▼永田：なんかそういう、美容師さんも含めてなんですけど、地域の中にそういう知識を持った方が増えていくっていうことそれ自体も重要だと思うんですけど、結構ご質問の中で、そこから実際に、例えば話を聞かれて相談につながったとかっていうような事例はあるんですかっていうご質問なんですけれども、その辺はいかがでしょうか。

▼吉田：まだどういう内容があったかっていうようなことは私のところまで届いてきていないんですけど、本当にその研修の場に来てくださったLGBTQプラスの当事者の方が、やっぱりすごい美容室探してるって、自分がその美容室を、例えばいつもずっと行ってた人が、なんかもうやめなきゃならないってなったときにまた自分が新しい美容室を探すときには、それは自分がカミングアウトをしていくっていうことと一緒にだからすごいハードルが高いので、どうぞウェルカムってそれこそステッカー探して、ぜひ行きますとか、自分の仲間たちにもこのステッカーが貼ってあるところはいいよって言ってますみたいな感じで話をしてくれたっていうのは、すごいありがたかったなあと思っています。

▼永田：なんかこの地域福祉的な学びとか広がりっていうのは、何ていうんですかね、今何件ありますかとかっていうことよりは、なんかそういう理解してくれた人が地域が増えていくことが重要だと私は思うんですけども、でもやっぱり行政とかの視点に立つとそれは何件あるんですかとか、そういう方が何人いるんですかとかっていう話になってきやすいっていうか、行政の方もね、当然評価ってことをしてなきゃいけないので、そういうふうになりがちなところがあって、何かそこが悩ましいところだなんて思うんですけど。

一方でその美容師さんたちがそうやって仰ってくださったとか、当事者の方たちがそういうふうにお

っしゃってるとかっていうのは何かすごく重要なことだと思うんですが、これはですね、飯貝さんにとっては聞きたいんですけども、助成事業やられてるので、やっぱり評価ってことをやっていかなきゃいけないなっていますよね、最近ですと。

私達なんかも、例えば民間の助成財団である、それから行政のお金であっても、その事業が成果を出したのかってことを評価して説明しなきゃいけないなってる場面がすごく多くなってきていると思うんですけど、例えば、かがじょ基金の評価とか、それから吉田さんがやられてる事業の評価とか、そういったことをあくめさんではどういうふうにやらですか。

▼飯貝：そうですね。事業やられた成果に、何か○・△・×みたいなものとか点数つけたりは全くしてないんですけど、報告書いただいて、その助成事業の最初に申請いただいたときの計画の成果と照らしてはいます。ただそれをあくめだけで見のではなくて、報告会をオープンな場で開いて、それが地域課題円卓会議みたいな形で、報告会兼円卓会議という感じで、皆さんが事業された知見と、そのとき感じたもの自体を地域の人とシェアする、その場に社会学者の方に来ていただいたりとか、他の方面の方に来ていただいてその結果も見ながら、当事者の方も交えてお話するとかっていう会を開かせていただいてまして、何かこう評価するというよりも、その結果を皆さんでシェアしながらどう次へいったらいいんだろうなみたいな感じのことをしております。

▼永田：でもそれってある意味参加型で、皆さんでその成果を共有することで、ある意味納得感をみんなが持ち、いい事業だったねとか、もっと続けていったらいいよねとか、なんか素晴らしかったねみたいなことをみんなで共有していくってことですよ。

▼飯貝：そうですね。寄付者の方もいらっしゃるって、自分が寄付をしたものがこういう事業につながったんだっていうのを見にこられて、これがもっと広まったらいいねとかお話をされていらっしゃるんですよ。

▼永田：そういう意味での説明責任みたいなことを共有しながらそういう場を作ってやってるっていうのは、やっぱり民間の財団だから、しかもコミュニティ財団だからできる評価の方法かなと思いますね。すごいいいですよ。

▼飯貝：民間だから確かに。

▼永田：やっぱりなんか行政だと財政当局に報告しなきゃいけないとか、何件あったのかとか、そういうことがすごくフォーカスされちゃうんですけど、地域づくりってなかなかそういう短期的に成果が出ないことが多いので、そういう意味では、今飯貝さんがご紹介くださったような評価の方法っていうのはすごく参考になるんじゃないかなと思います。ありがとうございました。

いろんなご質問が出てるので少し議論が散漫なような感じになってしまうんですけど、1つはですね、最初に連携のお話をぜひしたいと思ってましたので、その点はぜひ皆さんにも、今日持って帰っていただきたいと思うんですけど、たまたまこうやってテーマ型の団体さんとか地域を基盤にしてやって皆さんがうまく出会うことで、いろんな切り口の中で、でも最初は入りにくかったっておっしゃってたのは確かに象徴的だなと思うんですよね。

少し違うようなところがうまく重なるきっかけができることで、いろんな展開っていうのが生まれてきて、そのためにそういう場を作ったりとか、コーディネートしたりしていく役割が重要なんだろうなっていうことと、それから地域づくりの評価みたいなことが、皆さんからのご質問の中で図らずも出てきたわけですけども、そういったことってのは、なかなか短期的にはパッとできないものが多いので、さっき吉田さんも苦笑いされてましたけれども、じゃ成果って何なのか、でもそれは出さなくてもいいっていうことではないので、どういうやり方でそういうことをみんなで共有していったらいいのか、それは地域づくりの評価としてですね、考えていかなきゃいけないなっていうふうに思いました。

せっかくですね、石尾さんがいろいろ発言をしてくださりましたので、今回のテーマの中の生きやすさっていうことについても少し話していきたいと思えます。

石尾さんにお聞きしたいんですけども、加賀で生活される中で、これが一番生きやすさにつながったと思うようなポイント、あったら教えてください。

▼石尾：やはり安心できる場所。やっぱり心の余裕、気持ちの余裕ですね。

▼永田：ありがとうございます。ご質問でもそういったご質問いただいてたんですけども、安心できる場所、それから余裕ですかね。

▼石尾：心の余裕です。

▼永田：ああ、心の余裕ってことですね。そういったことを生み出していく、その第3の居場所みたいなところを生み出していくために、どんなことが必要なかっていうことをですね、ぜひご登壇者の皆さんからも、石尾さんの話をヒントに聞かせていただきたいと思うんですけども。

そうですね、多分古井さんがそういうことはいろいろ取り組まれてると思いますので、ちょっと今日の石尾さんの話なんかもヒントにしながら、生きやすい場所を作っていくためにどんなことが必要なのか、少し古井さんのお考えを教えてください。

▼古井：相談に乗らせていただくと、実は私、編み物がしたいんだとか、麻雀したいんだとかいろいろなことを聞かせていただくんですね。でも足がないわって言われる、友達がいないから、知ってる人が誰もいないから1人でのいるんだ、先ほどの近藤先生の話じゃないんですが、そういった形でだんだんだんだん後ろ向きになってく、ネガティブな気持ちになっていく。

でも、私がちょっと感じている、石尾さんから聞いて思ったのが、何か興味があること、なんでもいいかなと思うんですが、ネットからでもいいかなと思うんですが、1人からでもできるようなこと、それが、誰にでもいいんですが、何か発信できれば、誰かがそれを掴んでくれるんじゃないかっていうような気が私はしてます。その発信されたことを誰かが掴んで、それがコーディネートできるようなつなぎ役を見つけたら、どこかにつながって、それが、生きやすさっていうか、安心できる、心のゆとりのできるような、そういった場を見つけてくれて、そこに導いてくれる。そんな気がします。

本当に言葉ではこんな簡単に私言ったんですが、何件も相談を受けてますが、その人たちに全員こういうふうにできたかなっていうとなかなかできず、本当に引き出しがないっていうか、こんな人がいるよ、こんな人がいるよっていうことをもっともっと知らなければつなげられないと思うんですが、そういったつなぎ役が絶対にこの地域の中、そして、

この生きてらっしゃるこの生活圏域の中には必要なんだなというような気がします。

▼永田：でもまさに古井さんは今それをやってらっしゃるわけですけど、そういう意味では、例えばみかんさんとか飯貝さんとかいうとこでつながるとんのコーディネーターとしての何か幅を広げていく、うかね。

▼古井：とってもよく感じています。もう何か広がったって感じがして。私を知る応援団がここにたくさんいらっしゃるんですが、本当に声をかけるっていうのがつらいときもあったりするんですが、ここに来てくださってる応援団の人は、古井さんこっちこっちとか言ってくださる、それから声をかけてくださる、で、困ったときには言ってくださる。そんな人がどんどんどんどん広がったなっていう気がします。この人たちが、私を応援に来てくださっています。ありがとうございます。

なので、今、飯貝さんなり吉田さんなり石尾さんなりとかうやってお会いさせていただいたことが、本当に心の宝物ですし、それを皆さんに返していきたいなと感じています。

▼永田：だからコーディネーターの人っていうのは多分1人で頑張りすぎちゃいけないで、いろんな人とつながっていったらいろんな人に頼れたほうがいいのかもしれないですね。

▼古井：頼れる人間になりたいと。頼らせてください皆さん。はい。お願いします。ありがとうございます。

▼永田：なんかね、若い女性のこの話が入ってきたら今度吉田さんに相談しようとかね、そうやっていろんな人に相談できる人が増えていくってのが、もしかしたらコーディネーターとしては重要なかもしれないってことだったと思います。ありがとうございます。

そうしましたら同じテーマで、吉田さんいかがでしょう。

▼吉田：ありがとうございます。私開業の助産師なので、日常的には母子保健にどっぷりの仕事をしているんですね。その母子保健界隈では、ここに困ったらこの人、ここに困ったらここ、みたいないろんなつながりがあるんですけど、そこから、その人たちはまたこの地元で生きていくときに、また違う困

りごととか、違うコミュニティの中に入っていったときに、次はどこってなったときに、本当にいよいよ広がっていくのかなあと思いました。

やっぱ地元ってすごく強くて、実は私、飯貝さんの一番上のお子さんのお産のときに1回うちに相談に来てくださってるので会って、古井さんの義理の妹さんと同級生なんです。で、石尾さんを誘ってくれた林君とも同級生なんです。なので、こうやって何かいろんなものにつながっていくと、それこそさっき飯貝さんが言ってらした弱い紐帯っていうのがあって、困ったときに、ちょっとあの人に声かけてみようかなって顔が浮かぶ人が増えていくっていうのも、すごく大事ななというふうに思いました。



▼永田：だから生きやすさ、もちろん強い紐帯が大事なときもありますけど、なんかさっきのやっぱ古井さんのお話聞いてても、ちょっとしたときに頼れるいろんな知り合いがたくさんいるっていうのが、なんかすごく生きやすさにつながっていく面があるんじゃないかなっていうのをお2人の話聞いてて思ったところです。ありがとうございます。

飯貝さんいかがでしょう。

▼飯貝：はい。自分らしく生きることができる地域共生社会にとって必要なものは、というので、先ほどの近藤先生のお話にもあったんですけど、やっぱ何か役割とか出番があると、みんな元気に自分らしくなるなと思うんですけど、その役割出番を得るためには、やっぱおせっかいなコーディネーターか、もしくは困ってるなあとかゆって引き出してくれるコーディネーター、コーディネーターっていうとすごい仰々しいんですけど、そういうおせっかいおじさん、おせっかいお婆さんみたいな方の存在が、ちょっと自分だけだと出れないっていう人の方が多いと思うんで、そういう人にとってすごい勇気という

かきつけを与える機会をみかんで目にしています。私、人に頼るの苦手な方なんですけど、みかんの店番されてるオーナーの方が、巧みなテクニックで、いろんな人にちょっと困ってるんやけどとか、あとはそう、時には強引に誘ってみたりとかされてらっしゃって、さっき写真にあったんですけど、例えば、能登の地震のときに二次避難されてらっしゃる方は、みかんの近くのホテルにずっと滞在してらっしゃったんですけども、その方たちの中で手芸教室できる先生の方がいて、気づいたらその方がみかんで教室を開いていたみたいない感じで。支援されてばかりだと疲れちゃうから、逆に会を開いてっていうところを、多分そうも伝えずにうまくコーディネートされてらっしゃったりとかして、そういう何かこうおせっかいとかコーディネートする方が、古井さんみたいにプロでやってらっしゃる方もいらっしゃいますけど、何かこうナチュラルにやる方も結構いらっしゃるんだっていうのをみかんにいて思ってるところでして。

そういう人がいっぱい増えてくるといいのかなみたいな、あくるめの中でもそのつながりがりをどうつなぐかって時に、そういった人の存在が増えてくるといいのかもっていうふうに思っております。

▼永田：ナチュラルな、地域の中にそういう力のあるコーディネーターじゃないけど、なんかそういうつなぎ手みたいな人たちって実はたくさんいらっしゃって、そういう方たちとね、一緒にやっていくことで、多分古井さんはそれが上手なんじゃないですか？だからそういう方をたくさん知ってらっしゃって、いろんな方がちょっとこういうこと困っているんだけどなって発信すると、つなげる人たちがたくさん周りにいる。多分それが本当はコーディネーターが全部1人で頑張ってるんじゃないって、そういう方が地域にたくさんいらっしゃって、そういう方々つなげていくみたいなのが大事なのかなっていうふうに思いました。

ということで石尾さんどうでしょうかね、皆さんは緩やかなつながりとか、助けてと安心していえることとか、そういったこと大事なんじゃないかとおっしゃってます。

▼石尾：そうですね。当事者としたらやっぱりそれが大事なことだと思います。やはり孤立、孤独それ

が一番よくないことなんです。だからそういうものを解消するためにどうするべきかってことですよ。

▼永田：せっかくなので、石尾さんに1個たくさん来てる質問があって、在宅士、とってもいい言葉だなとか、センスがいいネーミングだなっていうご意見と、誰が考えたネーミングなのかって、使ってもいいのかっていうご質問も来てましたけどいかがでしょうか。

▼石尾：僕の親方の林さんが考えてくれました。在宅士1級が、ひきこもり歴10年以上、ひきこもりと堂々という、ひきこもりの活動をする現役ひきこもりです。2級になると、ひきこもり歴があり、ひきこもりを堂々という、ひきこもり活動をしている、仕事を持っている、そういう方です。

▼永田：ということで後程ですね、林さんにお聞きをしてですね、こういう名称を広げてもいいものなのかどうか、またその定義についてですね、ぜひ懇親会とか別なところでもご議論できればと思いますので、はい、ありがとうございます。

そうしましたらですね、少し皆さんと質問にも答えてきましたので、若干話が横にいったりもしましたけれども、ちょっと今日皆さんと共有したいポイントだけお話しておきたいと思います。

私もちょっと皆さんのご質問を見ながら考えてたので、全部をカバーできてないかもしれないんですけど、まず飯貝さんのですね、あくるめの活動から地域の中の気づきとかつぶやきですよ、これを飯貝さんはイシューレイジングっていう言葉を使われてたと思うんですけど、皆さんも地域の中でそういった課題感を持ってつぶやかれている方っていうのはたくさんいらっしゃると思うんですよ。ただなかなかそういう方にたどり着けてなくて、そういう声を拾えてないっていう面もあるんじゃないかなと思います。

また、誰かのほっとけないっていう言葉を吉田さんが使われてたと思うんですけど、ほっとけないなんて思ってる人たちのそれを行動につなげていくっていうきっかけが非常に重要なんですよ。そのチャレンジを、背中を押すみたいな役割ですよ、幸い加賀市さんでは、それを飯貝さんたちが、例えば民間の財源を使って応援をする。ご質問の中でも他にも幾らぐらいそれがあるのかとか、いろいろ細か

いご質問きてたんですけれども、ぜひまた後程つかまえてですね、ご質問していただければと思います。

私ちょっと書いたんですけど、やっぱりまず民間でそういった 이슈を捕まえてまず解決しようという努力をしていく。それが少しく形になってくると、それは行政がしっかりと応援してもらおう。それが本当の意味での地域福祉の進め方かなっていうことを今日改めて思ったところです。

それからつながりですけれども、強いつながりっていうのももちろん大事なんですけれども、やっぱり緩やかなつながり、弱い紐帯の強さ、みたいなことも今日改めて感じさせていただきました。

地域づくりっていうのは難しく、なかなかこう評価とか、何件できた、幾つできたっていうのが難しく、偶然のような、後から振り返ると必然のようになってというのが地域福祉の特徴だと思うんですね。例えば、吉田さんと古井さんが今日出会った。もしかしたら半年後に何か別なことが生まれてるかもしれないけど、生まれてないかもしれないし、それが1年後かもしれないし、でもそれは5年後かもしれないわけですよね。そういう新しい出会いが何かを生み出していくっていう可能性を信じてやるっていうのは、私は地域福祉だと思ってるんですけれども、ただそれはなかなか行政の評価とか施策となじまないところがある。そこをどう工夫していくかっていうのが改めて重要だなと思いました。

ただ、それをコーディネートする古井さんのような人材とか、それからお金ですよね、これは今回はあくるめさんがそういう活動をされている、出会う場、プラットフォームですよね、こういったものを作っていくことで偶然の角度を上げていくっていうか、なんかそういうことが大事なんじゃないかなっていうふうに思いました。

あと今日ですね吉田さんのご報告の中で、やっぱり日常生活の延長線上にある場っていうのが相談とか、それからつづやきを拾っていくための重要な場になるんじゃないかなってことも改めて感じました。今日は美容室でしたけれども、さっきも喫茶店とかですね、いろんな声が出てたと思います。皆さんの地域で、人の活動の延長線上に人が集まっている、つづやきが集まっている場所、どんなところがあるかなと、そんなこともぜひ考えてみていただ

ければと思います。

また学びによってそういう基盤、地域の応援団ですよね、例えば若い女性の課題を知ってる人が地域の中に増えていく、そういう課題感を持つてる人達、アンテナを持つてる人たちが地域が増えていく、そういうことも大事なんじゃないかなっていうことも気づかせていただきました。

あと、問題解決ではなくっておっしゃってたのも私すごく大事だなと思って、あんまり取り上げられなかったんですけど、何かそこで解決するとかそこに何件あるとかっていうことよりは、何かそこで安心できるとか、そういう場を作っていくっていうこと、もしくはお客さんにならない出番の場っていうのは飯貝さんの本棚の活動がまさにそうなんですけど、お客さんにならない場所とか、さっき石尾さんがおっしゃってくださった安心できる場所とか、それって多分1個作っておしまいっていうことじゃないと思うんですね。地域の中にいろんな形でそういうものがあるってことが大事なのかなっていうことも学ばせていただきました。

ちょっと時間がないので、今日は触れませんが、ぜひこの機会に加賀市さんの地域包括支援体制、これ非常に特徴的なアイデアに溢れたものですので、この機会にぜひいろんな方に聞いてみてください。身近な拠点の中で、介護の事業所ですね、小規模多機能型居宅介護地域密着型の事業所が、包括のランチをしながら地域づくりを合わせてやっていくというそういうモデルです。ぜひこの機会に関心持っていただけたらと思います。

結論は出せないんですけれども、生きやすさっていうのは緩やかに受けとめてくれる場があって、やっぱり出番がある。私、古井さんがおっしゃった、助けた人が実は一番幸せっていうのはすごくいいフレーズだなと思ったんです。そこで役割が発揮できたことで、その人も元気になるし、もちろん助けられた人も元気になるし、そういう関係づくりをしていくっていうのが地域共生の考え方じゃないかなと改めて思ったところです。

ということで最後にですね、ぜひご登壇者の皆様から加賀のご当地シンポですので、参加した全国の皆さんに一言ずついただければと思います。

時間あんまりないので1分以内で、こちらからお
願いしたいと思います。飯貝さんからお願いします。

▼飯貝：はい。本日はお話を聞いていただきありが
うございました。おんせん図書館みかんがここから
1.1キロぐらいの場所にありまして、歩いて行くに
は姫路城より近くなっていますんで、ぜひ、5時から
6時、開いていますんで、もしよかったらぜひお越し
ください。玄関にパンフレット、みかんとあくるめ
とかがじょのパンフレットを置いてますんで、ぜひ
手にとっていただけたらと思います。

今日のご清聴ありがとうございました。

▼吉田：今日はお話聞きにきてくださいますありが
うございました。開業助産師なので福祉の場と
は本当は関係がなかったんですけど、これからもま
だどっぴりと頑張っていきたいなと思います。

今後ともよろしく願いいたします。

▼古井：今日は私たちのお話を聞きに来てくださ
いまして本当にありがとうございました。私は山代の
ことを伝えました。旅の人とか地の人とか言ってま
した。それから、介護の世界になると本当に少子高
齢化で、介護の手がないとかいろいろ言ってます。
でも今地域とのつながりということで、いろんな人
にお会いさせていただいて、1人の目の前の人をちょ
っと助けたっていうことが、その人にとってもすご
く嬉しいこと、そしてその人も幸せになる、そのち
っちゃなちっちゃな力が大きな大きな力になるんだ
なっていうことを、加賀市の今の事例発表から伝え
させていただきました。またよろしく願いします。
ありがとうございました。



▼石尾：僕の考える21世紀型の医療とか福祉って
いうのは、やっぱり病気とか、けが、障害とかを治す
とかじゃなくて、持っててもいいからどうやって幸
せに生きることができるか、そのことを考えるべき
だなと思います。まず、やっぱりわかってもらえる
こと、それからの話だと思います。

今日はありがとうございました。

▼永田：最後にまさに生きやすさってなんだろうと
いうことでね、ご発言いただけたかなというふう
に思います。

ちょうど時間になりましたので、以上で加賀のシ
ンポジウムを終わりたいと思います。

ご清聴いただきましてありがとうございました。

